HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代家族における母親の生活志向と子育て
Author(s)	北沢, 梅栄
Citation	北海道大學教育學部紀要, 61, 213-218
Issue Date	1993-06
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/29412
Type	bulletin (article)
File Information	61_P213-218.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

現代家族における母親の生活志向と子育て

北　沢　梅　英

Mother's Life Course and Rearing Children in Modernized Family

Baiei KITAZAWA

これまでの家族における子育て研究の多くは，しつけ・社会化の研究としてであった。その場合，子育てすることを社会的役割と見る面が強く，子育てする内容は社会的規範の面が強調されていた。(1)

その一方で，現実の母親の子育ての場面では，過剰な子どもへの期待と，その裏面の育児不安が多くの母親を襲うような状況がある。これに対して，子どもの成長での個人差を強調したり，近所の母親どうしの会話を奨励するという一般的処方箋しかないように見える。

私は，子育てで悩む母親は，完全な母親役割を目指して悩むのでなく，子育てという新たな課題に関わることで，これまでの生き方を問い直している面があると考える。しかも子育ては，他の生涯的課題と違って，相手（子ども）との相互的関係であり，その相手の成長によって，その関係も変化するという点で特徴的である。その意味で子育ては，子どもや子育てを支えてくれる人達との相互関係や相互関係そのものの変化の中で自己を問い直している過程として見ていくことが必要であると考えた。

【方法的枠組み】

このような母親の生き方と関わらせて，子育てを見る視角として生活史の方法をとりたいと考えた。生活史的な方法は，ライフコース研究として最近の家族研究の中でも注目されている。

森岡清美によると，現代家族では，従来のように家族を集団や共同体としてとらえ，発達段階ごとに家族をまとめて観察することは難しくなってきた。そのため，家族を観察の単位とするより，個人に注目し，個人にとっての重要な他者，協同者の中心的カテゴリーとして家族成員を考える。そして家族を集団というより，二者関係累積態としてとらえようとしている。(2)

日本人のライフコースを『生き方』として分析したプラースは，西洋人の成長の考えと比較して，日本人が個性よりも『人格』に深い注目をしていることを挙ている。プラースが，ライフコース分析で理解しようとしたことは，成熟のレトリックである。すなわち，「人々がどのようにして自分の行動に自信をもつようになり，自己決定の能力を高め，また周囲の人々の成長を高めていくか」ということである。プラースはさらに，諸個人の生活史こそ，今日の社会科学にとって不可欠な研究課題であると言っている。(3)

【母親のライフコースの概観】

私が，札幌市A地区で小学5年生を子育てする母親を選んで詳しくそのライフコースを検討したものは，北海道の農家に1946年から1955年に生まれた，約10年の幅のある出生コーホートであった。しかし，その出生家族での体験は同じではない。経済的状況や父母や兄弟の状況など出身家族や学歴が，その後の生活を制約する面の一方，これら要因が個人が生きたライフコースの中で

新たに意味付けられる面があり，この面にも注目する必要がある。

まず，中卒，高卒，短大・大学卒の学歴を同じ農家出身者の中の，出身家族の経済的・文化的状況を括る指標として，そのライフコースを見てみる。

農家出身の中学卒業者の場合，中卒(1)は離農直前零細農家であったから中学を卒業したら働くことを当然のように受けとめていた。中卒(2)は漁家の女手がなくて，中卒後9年間家の手伝いをすることを強いられたひとであった。このように個人を規定する条件を受け入れながらも，そのことを意味付けて生活しているという点が重要である。

高校以上の学歴を得た人の中でも，出身家族での経験は異なっている。農家の高校卒業者の場合は，その親に対する不満は，構って欲しかった，会話が欲しかったというものであった。農家の短大・大学卒業者は，父親が封建的で厳しかったことを自分の被子育て体験の不満として語っている。

この高卒者の中でも，高卒後，札幌に出て働く希望で仕事につき，職場結婚などをした人もいる。私が検討した事例の高卒(3)高卒(4)は，高卒後すぐに就職せず，洋裁学校に数年間通い洋裁の専門職を目指した人だった。

短大大学卒の二人は栄養士(5)，養護教諭(6)の専門的資格をとって，その専門的な仕事についている。このように出身家族の状況に次いで，個人のライフコースにとって次の重要な契機は，個人の生き方にとっての仕事の意味である。

中卒後，家の近くの雑貨店の住み込みで働いた中卒(1)も3年後，家から離れた市で洋裁の縫い子として働く。これは手に職をつけないと一人の女性として生きていくことは難しいと，自分の生き方を仕事を通じてとらえ返してのことであろう。そして新しい職場で見習いとして仕事を教えてもらいながら，与えられた仕事をこなすことが一番きついことだったと語っている。その時は我慢の時期だったのである。その我慢することを励まし，正当化してくれたのが，この人にとっては宗教の教えだった。職場の先輩，同僚たちがこの教えの仲間でもあった。そしてその職場で11年間働き続けた。そのことは彼女自身にとって誇りとなっている。

もう一人の中卒(2)は，結婚，出産後，家を買って，子どもを2歳から保育所に預けて仕事にでた。その事を自分にとっての転機と言っている。結婚前も家の中だけで生活していた人が，意を決してそとに働きに出たのである。そのことで，自分の性格が変わった。自分を出せるようになった。少し積極的になった，と語っている。彼女の場合，その職場で，近所に住む母親で子どもの年齢が同じで，同じ保育所に預ける同僚と知り合う。この同僚と一緒に職場を変え，移動し，何でも話せる友人となっている。

このように，その人が生活する上で，仕事の意味が重要であると同時に，それは仕事の仲間との関係と密接に結びついていることは，ライフコースの代表的研究者であるハレーブンも言及している。(4)

高校卒業後，洋裁学校に通い，洋裁の専門職としての仕事を歩み始めていた人の場合は，その二人とも，職場結婚ではなく見合いなどで結婚する。その後も夢を追い続けようとするが，出産でその夢を断念せざるを得なくなるという同じような経験をしている。

大学・短大卒業者は，希望の就職をするが，その後の違いが生じるのは結婚後である。

女性のライフコースにとって，第三の重要な契機は，結婚出産の生活史上のイベントを経験することと同時に，その際の新しい家族の状況，とりわけ配偶者との関係である。

中学卒業者の場合は，出身家族から受けた厳しい条件や，仕事上でのトラブルから個人を退避

させる意味をもっていた。

高卒後洋裁学校に行き，洋裁の専門職を歩んでいた人達は，出産とその後の子育てによって，その仕事の夢を断念さぜるを得なかった。その後の二人の生活史は，配偶者や子育てを含む家族の経験によって現在は違ってきているが，洋裁という専門の仕事に対する誇りや自信を自分の生き方の中に持っていることでは共通している。高卒(3)は，洋裁ではないが，椅子の外張りの縫製の仕事をしている。高卒(4)は，仕事をすることではないが「洋裁で教えたい」と言っているように，洋裁を通じて人との関わりを求めようとしている。

短大大学卒業者は，専門の資格を得て仕事に就き，同僚的な配偶者を得ている。しかし短大卒(5)は出産によって仕事を断念した。大卒(6)は仕事を継続しながら同僚的家族を維持してきた。このような違いは，栄養士と教員の女性が仕事を続ける条件の差が，この人達の結婚出産後の生活の違いを際立たせたと思われる。栄養士を１年間して，主婦専業になった(5)は，その資格や仕事を今後の生き方のよりどころにしようとは現在は考えていない。そしてこれからの生き方の関与者は夫の比重がとても高い。

養護教諭を続けてきた(6)は，自分がこれまでの人生で悩んできたことの軸は，仕事の面を軸にしてであった。養護教諭としての専門性とは何かについて悩み，仕事の行き詰まりを感じたとき，一番つらかったと言う。この時，悩みを共有し励まし合ったのは，同僚の養護教諭たちであった。この仕事の悩みは，一般の小学校教諭の夫にも相談してもわからないことだったとも言っている。このときのこの人の，意義ある関与者は仕事の同僚であった。

【母親のライフコースと子育て】

こうした人たちにのライフコースと子育ては，どのように関わっているのか。私は，多面的な子育ての中で，従来子育て・しつけ研究で取り扱われることが多かった部分を，同じ地域に住み，同じ年齢の子どもをもつ共通の状況であることから，地域・学校要因として分析した。それを(a)友だち関係への注意，(b)上下のけじめ，(c)手伝い，(d)お金の与え方・使い方，(e)子どもに習わせていること，(f)中学・非行への心配，(g)成績・受験・子どもの将来，の７つに分けてそれぞれ分析した。

(a)　友達関係。中卒(1)は人間関係が大事で，それは生きていくために必要な条件だからというものだった。中卒(2)は子どものおとなしい性格を心配している面もあるが友達と外で元気に遊ぶことを望むというもの。高卒(3)は友達とうまく遊べない心配があり，いじめの心配もある。高卒(4)は友達から注意してもらって自分をよりよくしていくという，いわば友達との関係は人間形成の場と考えているようである。短大(5)は友達との関係で悪い方向にいってしまうことを心配していた。大卒(6)は仕事や家庭とともによい友達をもつことは豊かな人生にとって重要な要素だから大切にすべきだというものだった。

このように「友達，人間関係は大事である」というのはプラースも言うように，日本人の自己の成長にとって不可欠の条件であるが，その母親の生き方と子どもの状況によって意味付けは違っているし，子どもに対する働きかけもそれぞれに違っている。

(b)　上下のけじめ，言葉づかいは，友だち関係と近いが微妙に違っている。上下のけじめを社会に一般化された規範として子どもに対して接しているのは中卒(1)と高卒(4)だけであった。その二人は信仰と結びついている面が強かった。しかしその二人の考えは(a)でみたように同じではない。そこには人としての成長に対する考えの違いがある。

短大(5)は教師に対する言葉づかいに関してだけ注意していた。それは教えてもらう立場だからというもので，上下関係よりもむしろ立場に応じた合理的態度を持てという要求である。高卒(3)は親子のケジメを日常的な生活の監督という形で体現している。残る中卒(2)と大卒(6)は，手をあげないという形で子に対する親の態度を明確に持っていた。

(c) 手伝い。男女の性別で女の子に家事の手伝いが偏っているのは中卒(2)だが，それは姉弟の年齢差が理由となっている。両親が女の子は家事がしっかりできないと駄目だと明言しているのは，高卒(4)である。しかし実際には弟とは大きな差がつかないように配慮している。これは女の子の平等要求があるためと思わる。女の子だけのきょうだいでも二人とも余り家事の手伝いをしていない大卒(6)のような例もある。兄弟が同性の場合，年齢で差をつけている家庭もあれば，それほど差をつけていない事例もあった。例外なのは，手伝いに小遣いカットのサンクションを付けた高卒(3)の例であった。

このように手伝いにおける性別・年齢規範も徹底して見られるものではなかった。これは母親の考え方や家庭の状況，子どもの側からの意見の表明の影響など，複雑な要因が絡み合ったなかで，全体的な子育て方針があって，子どもにどんな家事をさせるかが，決まってくるというものである。

(d) お金の与え方・使い方については，多くの人が小遣いなしや，500円以下の金額である。この金額も担任の教師の助言のようであった。使い方でも，与えたお金を食べ物やおやつに使うことを禁止していた。買い食いがひどい時期に，教師が母親たちに注意したということであった。お小遣いの使い方も母親の承諾を得て使うというものである。お年玉についても全額，または半額貯金させている。その使い道も自由でなく，母親の許可を得て使うというように厳しい。これは地域の非行という共通した不安があるためと思われる。

(e) 子どもに習わせていること。この6人では，習字が4人，算盤は習字を習わせている人の中の3人，フルートが1人，ピアノが1人，スポーツで水泳1人，少年野球団1人で，何も習っていない人はなかった。学習塾，英語塾に通わせているひとは0だった。しかし習い事だけから親の子育て価値・子育て志向を見ることは困難である。

(f) 中学・非行への心配。この6人とも勉強のことと非行・いじめの心配に集中している。何も心配ないという人はいない。現在の子どもの心配はないが，地域の中学の状況や，高校進学への不安が強いのである。勉強についていけるかを心配している人は3人（中卒(1)，高卒(4)，大卒(6)）いるが，勉強のことだけを言っているひとは，一人もいない。先にみた(e)で塾に通わせている人が一人もいなかったことと同様に，勉強中心とはいえない面がでている。

全員が非行やいじめについて心配している。はっきり非行に走るのではないかと心配しているのが2人，はっきりいじめの心配をしているのは，かつて子どもがいじめられた経験を持つ1人だけである。残りの3人は，「友達関係維持していけるか」という(a)でみたようなものである。

現在，上の子が中学に通っていて状況がわかっている人では，はっきりと非行やいじめを心配している人はいない。その意味で中学への不安・心配は一様でなく，実情がわからないままに不安が増幅していることがわかる。

(g) 成績・受験・子どもの将来。学校に期待することで，勉強面を期待しているのは中卒(1)だけで，その理由は「読み書きは親より学校の方がよい」ということである。

その他には，今の学校が忙しくてゆとりがないことを言っている。例えば高卒(3)「ちょっと外れた子…を引っ張っていく指導が大切だと思います」，高卒(4)「今の学校は，これだけ教えた，

という感じ。一から十教えても子どもにはどれも残らない」と教育内容の精選を望み，大卒(6)「のびのび育てる，ゆったりする余裕がない。学歴偏重のところがある。欠けているのは情緒面，そういうのを育てなくてはならないと思う」という要望がある。

子どもに望む学歴では。中卒(1)が「行ければ高校までは」，のほか5人が大学を望んでいる。高校までという中卒(1)の理由は「子どもは中学でいいと言っているが高校まで行かないと今の生活できない。」という最低の生活防衛的な意味である。

大学までと言っている5人のその理由をみる。端的には高卒(3)が「今は学歴社会ですから」。高卒(4)が「自分のやりたいことするには。学歴ほしいわけではないけど。会社入っても高卒だけではできない，ということないように。大学出てればやりたいことの選択の幅がある」。短大(5)が「本人がいきたいと思うところ。子供は大学まで行きたいといっているから。上の子が言っているから，自分も大学に行くと言っている。勉強嫌いでないし，学校の先生になりたいと言っているから，(母親が) それなら大学に行かないと…と言っている」というものである。

この高卒(3)，高卒(4)，短大(5)のように，子どもの学歴への期待とは〈子どもに選択の幅を初めから狭めることはさせたくない〉というような消極的な学歴志向であって，より高い学歴によってその後を生活を有利にしようという積極的なものではない。子どもが〈大学でも仕事でも行きたいところ，したいことをする〉ことが親としての最大の望みなのであって，大学卒の学歴はそれをかなえる条件と母親が信じているだけなのである。生活史決定論に陥らない慎重さを要するが，高卒(3)，高卒(4)，短大(5)には共通の内面的経験がある。高卒(3)は高卒後，洋裁学校に3年，高卒(4)は高卒後，洋裁学校に6年通いデザイナーか洋裁の先生になろうとしたが，結婚や出産で断念していた。短大(5)は栄養士になる希望をもって短大で資格を取り就職したが，栄養士として働いたのは1年だけで出産で退職している。このように高校卒業後，専門の学校を修めながら，専門の仕事を中途で断念せざるを得ない体験をもった人達であった。

やや，違うのは，大卒(6)が「いろんなことを経験させたいので社会に出るのはいつでも出れますから。一応大学までいって学生生活も楽しんでほしい。本人がなんていうかアレですけど…。」と言っている。中卒(2)も「それなりの教育受けた方がいい。私は中学しかしてない。勉強すればそれなりの視野ふえる。算数，国語だけでなく，友達もできるだろうし。」といっている。この二者の理由の内容は同じではないが，より長い学校での経験で視野を広げてほしいという点で共通している。この学校への期待は，より広い視野，友達を求めると同時に，仕事では手に職をもつ仕事がいいということを望んでいる。中卒(2)と大卒(6)の生活史は，学歴や仕事では違う点が多いが，仕事を通じて重要な仲間を得ているという点で共通したところがある。

このように成績・受験・将来展望では，〈とにかく高い学歴をつけるために勉強しろ〉と親が子に要求しているように見えるが，実際の子育てでは，それぞれの母親の生活史評価と子どもとの相互的な対面過程から，母自身が自分の生き方を振り返りながら，子どもに接していることがわかる。母親の被子育て経験や学歴など出身家族要因が，子育てに直に関与するのでもない。

この(a)〜(g)の項目は，従来の子育て・しつけ研究では，これら項目を個別に分析するだけであり，規範的働きかけとしてみていた。これが子育て・しつけ研究の限界であった。

現実の子育てには母親の生活史の意味づけが生きていた。他方で子どもの社会的自我拡大とともに母親の意味ある関与者の面，子育て過程での相互行為過程の面が強くなり，母親に人生の意味を考えさせるようになる。このように母親の生活記述であり，成熟の記録としてのライフコースと，その個人が担う子育てを通じて記述される子育て内容は，相互に関わり合っていた。(5)

【注】

(1) 日本で非パーソンズ枠組みの事例研究では，小山隆編『現代家族の親子関係』1973培風館が代表的。その後支配的となったパーソンズの枠組みを利用した社会化研究も規範的である。

(2) 森岡清美「ライフコースと世代」森岡清美・青井和夫編著『ライフコースと世代』1985 垣内出版 PP 11－24

(3) プラース D. W.『日本人の生き方』1985 井上俊・杉野目康子訳 岩波書店 PP 309－334

(4) ハレーブン T. K.『家族時間と生活時間』1990 正岡寛司監訳 早稲田大学出版部 PP 116－117

(5) 子どもの個性の成長が，親子相互行為に与える要因の分析の部分は，紙幅の制約で掲載不能でした。